

52. 肝細胞癌の骨シンチグラフィの検討

大草 昭彦 熊野 町子 有田 繁広
 播野 賀子 大西 卓也 松本富美子
 馬淵 順久 中川 賢一 藤井 広一
 浜田 辰己 石田 修 (近畿大・放)

肝細胞癌は予後不良の疾患であるが、近年、総合画像診断法の発達・普及により早期診断がなされ、早期より積極的な治療が行われている。その結果、生存期間が延長し、それに伴い骨転移症例も増加する傾向がみられる。そこでわれわれは昭和62年4月から昭和63年3月までの1年間に肝細胞癌と診断された37症例にスクリーニング検査として骨シンチグラフィを施行し、その有用性につき検討を試みた。37例中骨転移症例14例、疑陽性3例と37.8%の検出率であった。そのうち多発性9例、単発性8例であり、Sensitivity 100%, Specificity 87%の結果が得られた。骨転移部位は肋骨(23.3%), 胸椎(23.3%), 腰椎(20.0%)と肋骨・椎体に多く認められ、四肢骨・頭蓋骨には少ない傾向がみられた。肝細胞癌の型および進行度、性別、年齢、 α -FP値等と骨転移との相関は認められなかった。

肝細胞癌の骨転移は諸家の報告では1.6%~20.0%である。われわれの結果では37.8%と高率に骨転移が疑われたが、骨転移症状の認められない症例がほとんどであった。

以上の結果より、肝細胞癌において、骨転移のスクリーニング検査として、骨シンチグラフィは有用であると考えられた。今後、さらに症例を重ねて検討を試みる。

骨シンチグラフィが有用であった症例を供覧した。

53. 胃癌の骨転移について

日野 恵 伊藤 秀臣 山口 晴司
 才木 康彦 羽瀨 洋子 大谷 雅美
 木村 裕子 宇井 一世 池窪 勝治
 (神戸中央市民病院・核)

胃癌は骨転移の頻度が低いいため注目されにくく、これについての詳細な報告はきわめて少ない。われわれは昭和59年から62年までの4年間に骨シンチグラフィを施行した胃癌患者のうち、骨転移の有無の判明した73例について検討した。

73例中18例(25%)に骨転移が認められ、男性では46例中13例(28%)で、40~70歳代に分布し、女性では19例中5例(19%)で、若年者に多い傾向があった。早期癌および進行癌のBorrmann I, II型では骨転移は認められず、Borrmann III, IV型で多くみられた。手術所見との比較では、漿膜および腹膜浸潤度とはあまり関連がみられず、リンパ節転移との関連が強かった。胃癌の組織型との比較では、乳頭腺癌1例、管状腺癌2例、低分化腺癌6例、印環細胞癌5例に骨転移がみられ、分化度の低いものに転移の多い傾向がみられた。骨転移の部位では脊椎、肋骨、骨盤が多く、骨転移陽性者は他の臓器への転移も多い傾向がみられた。骨シンチグラフィの所見から、骨転移の様式は3つのtypeに分類できた。転移が1つの骨格系に局限するlocalized type 3例、2つ以上の骨格系にわたるmultiple type 11例、central boneにび浸性に浸潤するdiffuse type 4例である。multiple typeではX線写真で溶骨像を呈するものが多く、胃癌組織像との比較では、11例中6例が低分化腺癌であった。diffuse typeでは、骨硬化像が優位であり、4例中3例が印環細胞癌であった。骨転移と血液化学所見との検討では骨転移陽性者で血清ALPが有意に高値を示したが、血清Ca, P, およびCEA値と骨転移の有無との間には明らかな関連を認めなかった。

54. 副甲状腺機能亢進症のDPAによる骨塩量測定

岡村 光英 小泉 義子 井上 剛志
 福田 照男 越智 宏暢 小野山靖人
 (大阪市大・放)
 萩原 聡 三木 隆之 西沢 良記
 森井 浩世 (同・二内)

副甲状腺機能亢進症(HPT)の骨脱灰の程度の判定にdual photon absorptiometry(DPA)を用い、全身骨、頭蓋骨、腰椎の骨塩量を測定した。対象は副甲状腺摘出術または亜全摘術(PTX)前に検査した原発性HPT 6例(全例女性)、続発性(腎性)HPT 14例(男性6例、女性8例)と、PTX後のみ検査施行の続発性HPT 10例(男性7例、女性3例)である。検査項目はDPAによる全身骨、頭蓋骨の骨塩量(bone mineral density: BMD)、腰椎L₃のaverage areal density(L₃ AAD)測定と、single photon absorptiometry(SPA)による橈骨骨塩量測定である。